

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第128回例会

日時 昭和39年12月4日(金)午後2時より

場所 東京女子医科大学 本部講堂

1. 本邦の肺炎・気管支炎と胃腸炎死亡率性比

(衛生) 平沢 英子

かつての主要死因であった肺炎・気管支炎と胃腸炎の死亡率性比について年次別にその変化を観察した。

府県別訂正死亡率を算出し、その死亡率性比をみると、肺炎・気管支炎では全国、各府県ともつねに性比100以上を示し、男性死亡率が女性のそれを上まわっている。胃腸炎では全国で大正9年以後性比は100以上となり、府県別では、北海道、鹿児島が各年度とも100以上、石川では100以下を示している。

また年齢階級別死亡率性比をみると、両死因とも0~4才で100以上、5~9才で100以下になっている。肺炎・気管支炎では時代の進むにつれ早い年齢で再び100をこえている。胃腸炎では年次の進むにつれ100の値に近づいているが100以下であつて、昭和の戦後になり、はじめて高令になると性比が100以上となる。

2. リンパ肉腫症の1治験例

(小児科) ○高尾幸江・川田和子

病理組織学的、臨床的にも、リンパ肉腫症と診断された4才6カ月の女兒に、*Streptomyceschrysomallus*の培養液より得られた *Accimomycin C* および *Tespamin* を使用し、自覚的 he 覚的に著しい改善を得、発病後5年をへた現在でも、元気に日常生活をいとなんでいる1例を経験したので、ここに報告した。

3. 抗酸菌による n-alkane の代謝

第2報 抗酸菌による n-セタンの酸化

(生化学) ○降矢 熒

(細菌学) 中西 清子

種々の炭化水素が各種抗酸菌の呼吸を増加させることは既に多くの研究者により報告されている。この呼吸の増加の説明としては、これら水に不溶性の炭化水素、自身が酸化されるばあいと、内在基質の酸化が増大されることによるばあいとが考えられる。

演者らは東京女子医科大学学会第29回総会(昭38)で、土壌より分離した抗酸菌、本学中検細菌部より供与された非定型抗酸菌の生菌懸濁液を用い、基質炭化水素として n-ドデカン、n-セタン(150~250 μ M)、その他の

基質としてグリセリン、ピルビン酸、フマル酸、コハク酸、 α -ケトグルタル酸、クエン酸(何れも10 μ M)を用いて、基質のみ、および基質+n-alkaneの酸素消費を測定し、これらの炭化水素は上記の基質の酸素消費に影響を及ぼさぬことがわかつた。

抗酸菌の内在 R.Q. 値は0.87~0.90を示し、n-セタンに由来する R.Q. 値は0.14~0.39であつた。n-セタンが完全に酸化されて H₂O と CO₂ になるばあいの R.Q. 理論値は0.653であり基質として加えた n-alkane の一部分が酸化されることが推定される。それで n-セタン-1-C¹⁴ を用いて CO₂ への C¹⁴ の介入をしらべ、n-alkane は抗酸菌により一部分酸化されることを証明した。

4. 最近10年間に経験した縦隔洞腫瘍の自験例

(外科) ○新井 克志、石原 昭、市川 博之

食道、気管、気管支および大血管の腫瘍を除いた、いわゆる縦隔洞腫瘍は組織学的には多種多様の様相を呈するが、一般に自覚症状の少ない事が多く、発見が困難であつたために、われわれ外科医を訪れる事が少なかつたが、近年、学校、職場等における定期的集団検診、特に胸部レ線間接撮影の普及に伴つて発見率が著しく向上し、外科的治療を受ける者が増加した。われわれは東京女子医大外科において経験した本症は、最近5年間に37例を経験したが、その以前の5年間にはわずか12例を経験したのみであつた。これらの症例の入院時主要症状、診断および手術手技、剔出腫瘍の病理組織学的分類、および手術成績等に関して追究し、本邦および欧米における本症の統計と比較検討を加えて報告した。

5. [症例検討会]

胸椎後部カリエス手術後、肝障害、高熱、発疹を主徴とした1死亡例について

司会 森崎直木教授

追つて全文を本誌に掲載する予定。

6. [綜 説]

心電図からみた先天性心疾患

(小児科) 草川 三治

心電図は新生児から成人に至るまでに、年齢と共に、